

末黒野

すぐろの

7月号 (通巻827号)



姫りんご

小川 玉泉

(名誉主宰)

人の和の堅き末黒野緑立つ
囀りに耳を預けて米を研ぐ
百年を木机に刻み庭桜
上枝みな空を指しをり山桜
枝覆ひ花純白の姫りんご
庭先の楓芽吹きぬ真紅

百年を木肌に刻み庭桜

我が家の北隣との境に山桜がある。幹の太さは根方で四十センチはあり戦争中を生き続けた桜である。「桜切る馬鹿梅切らぬ馬鹿」と言われて生き延びた桜である。

春は心を和ませてくれ、夏は荒々しい木肌が

春
愁

俺々詐欺他人事として四月馬鹿
玉垣の苔むす石や花蘇枋
株立ち連翹恣意の枝垂れて
町川へ捨て身の枝や雪柳

松本三千夫

松籟の絶えぬ町並散る桜
てふてふの垣の高さを測りをり
うようよとうようよと蟋蟀うようよと
春塵の靴脱ぐ靴の草臥れて
白砂を踏む春愁の影を濃く
埒もなく森へ深入り春愁
風光る石屋の石の亀蛙
駅の灯を離れてよりの月おぼろ

春手袋

黒滝志麻子

(副主宰)

初蝶やまだ山風に乗り切れず
鷹鳩と化して飛びたき今日の晴
積まれたる粗朶の雨聴く弥生尽
花のやうに春手袋を持つ真昼
雲を洩る日の安らぎや藤の花
鯉の尾の水切る力初桜
人と犬乗せたる渡し桜どき
紫雲英田の風より明けて湖畔宿
貝塚にまぶしき光鳥の恋
軋み合ふ風の真竹やつばくらめ
春時雨蚕飼名残りの壁の染み
大いなる鎮守の楠や百千鳥

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

花の變

田中臥石

餅草を摘みをり遠く海の音
我両目疾患、長子事故被害共に手術
花仰ぎ妻の涙を見ぬふりす
介護士の娘頼みや花の冷
眼帯の暗黒花の風匂ふ
眼帯を取り白光の花堤
春の雪降る手術後の保護眼鏡
夕さりの花の残像臉にす
海鳴りの地の明るさよ燕来る
鋤終へし屋敷裏田の初蛙
業苦とや両目手術の花の變

豆の花

松田泰子

水仙を挿して隙なき壺の口
乳母車押し入れてあり花菜畑
たんぼぼが主役脇役いぬふぐり
沈丁のつぼみながらに匂ひけり
さくら散る海に一撒きほどの舟
春風や海を見にゆく肩車
手をあげて春の鴉に応へけり
花吹雪哀しきことは不意に来る
花舗しまふ水の音して朧月
重さうな獣医の鞆豆の花



初

蝶

森清信子

沢音の明るき庵や木の芽風
紐ほどくやうに初蝶縁離る
代々の庵主の句碑や花あせび
犬ふぐり胸に抱きたる新刊書
歓声の子らへ絶えざり花吹雪
さざ波の末広がりや残る鴨
かがみこむ幼の背や鼓草
大空へ迷へる如き桜かな
青空の映りて昏し蝌蚪の国
喜捨を待つ雲水橋に花吹雪

初

蝶

安齋久英

初音聞く背にぬくとき日を溜めて
水底に身を没しつつ鴨交る
野点傘にしばし安らぎ竹の秋
路地奥や雨に烟れる花ミモザ
落椿一句を紅失はず
初蝶の穢れなき白よぎりけり
首もたげ風を重しと葱坊主
花の雨沖の小島の模糊として
子等の声弾け山菜莢色こぼす
花桃や垣なき村の暮らしぶり

春炬燵

大橋伊佐子

白木蓮廃屋しばし明るくす
白壁の町家の路地や花吹雪
晩年へ刻とどまらず散る桜
夜桜やぼんぼりの灯の橋二つ
海女の日を語りつ栄螺売りゐたり
父母が居て夫が居し日の朧かな
気儘とは時にさびしき春炬燵
炬を塞ぎ心もとなき夕べかな
摘んで来し花菜も添へて夕餉かな
手さぐりに目覚し叩く朝寝かな



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



蛙聞く
中野久雄

山畑の風きららかや豆の花
茅葺きの山門潜り丁字の香
挑まれて二局目を指す日永かな
日に映えて棚引く雲や春の夕
放牛のこゑ眠たげや春の昼
蛙聞く電車待つ間の無人駅
灯点りてより色めけり藤の花

卒業歌
齊藤マキ子

松の芯
西川みほ

卒業歌 体育館を溢れ出づ
大磯へ車窓明るき春の海
咲き初めぬ吉田茂を知る桜
じぐざぐに声登りゆく桜山
鍬担ぎ農夫の過る花の寺
花吹雪子の背に余る剣道具
雲上の富士遠く見て磯遊び

雨一過雫の光る松の芯
春灯に透かすビードロ子の土産
一樹二樹初花探す杜の道
朝の鳥発ちて梅の香ひろごれり
露天湯や臍に点る里曲の灯
春立ちし古刹に絵馬の溢れけり
短夜や亡き母に逢ふ夢淡し

青炎集

小川玉泉選



横浜 谷貝美世

横浜 小田嶋野笛

こゆるぎや終ひ彼岸の富士真白

海までの風の小径や花ミモザ

花の風抜くる横丁神楽坂

外濠や風のなき日の花筏

迷路めく黒塀の路地花吹雪

二代目の苑の要の桜咲く

横浜 小山直子

横浜 外山節子

星のきらやどとして夜の桜かな

双蝶や鎖の模様宙に編み

冷かしと見抜かれてをり苗木市

呟くは十七文字や春愁

桜湯のゆつくり開く両家の座

野仏の髷にしみ入る春しぐれ

閑伽桶を地に置き見上ぐ初桜

囀や不動の髪に迦楼羅^{かるら}棲み

春塵の茶殻まみれを掃き寄する

掃除機を奏つるごとく春の塵

蝌蚪の面の三日見ぬ間の目鼻かな

春昼の水跳ね散らし鯉の恋

菜の花やみんな隠れて鬼ひとり

花の雨出店仲間の立ち話

一年生夢にふくらむランドセル

菜飯炊き常より早き夕餉かな

わが里の牧にて憩へ巢立鳥

針箱の旧姓かすか春愁

大網白里

鈴木礼子

横浜

今村千年

屋根越ゆる白木蓮を仰ぎけり

畑の風一手に捉へ雪柳

朝の膳縁に持ち出し初音聞く

初燕軒を掠めて旋回す

田打機の音高々と耕地風

畑隔て学習塾や八重桜

横浜

福永幸子

横浜

和田慈子

鴨引いて杭一本の残る池

たんぽぽや幼の靴の脱げやすく

父よりも大き靴履き卒業子

病み抜けの狭き歩巾や犬ふぐり

はこべ手に八十路の友の幼顔

惜春やぐらり揺らして舟に乗る

日野

中村月代

横浜

小嶋紘一

京上ガル下ガルを覚え花行脚

空透けて真つ直ぐ揚がる告天子

囀りや鎮守の杜の樟大樹

桜守の里の桜の極みかな

咲き満ちし桜ひと時隠す雪

清流の石のゆらめき花筏

こゆるぎの渚に拾ふ桜貝

冠木門の藤村旧居白椿

片言の稚の電話や水温む

春泥の靴乱雑に保育園

春泥を抜けて春泥化粧坂

春泥をシャツにパンツにラガーマン

横浜

和田慈子

西行に捧ぐる一枝山ざくら

放生の鯉ゆつたりと春深し

散る花や身を寄せ合うて野の仏

冲眩しきぶし鈴振る杣の道

ダイケアのお手玉遊び春うらら

昼月や遠目にするき柿若葉

横浜

小嶋紘一

茅花揺れ風ゆつたりとたもとほる

花曇ほほに触れたき伎芸天

物憂げなる阿修羅の顔や花馬酔木

春の闇ただひたすらに結跏趺坐

剥落の仏の裳裾夏近し

素晴しき子等の笑顔や甘茶仏

耕 土 集

松本三千夫選



漆山 浩一

駅立ちの托鉢僧や花吹雪

木仏展みちのくの春祈りけり

連なりて折線グラフ辿る蝶

盥打ち亀よ鳴けよと下校の児

肩押し合ひラガー蹴上ぐる春の泥

新潟 太田チエ子

種袋上がる地温を待ちにけり

七十年戦なき世や桜咲く

道路鏡雪解の山河写しをり

雪形の馬を追ひ越す新幹線

日本海まだ芯のある寒戻り

柏 淵田 則子

春寒の齢に重き引戸かな

目覚むればナースの笑顔夜半の春

つかの間や上野の山の忘れ雪

深呼吸両手ひろげて春掬ふ

黒光りする鍬の背や畦塗れる

西東京 河口 知重

一族の墓を抱きて大桜

老犬の覚悟の看取り涅槃西風

目黒川ワイングラスに花映り

忘却てふ術を知りたり菜種梅雨

どれも皆背筋伸ばすやチューリップ

振り返るころもとなき新入生

横浜 小林 和世

啓蟄や小川の淵に遊ぶ子等

ごつごつの枝にほつほつ梅の花

皺の顔手術の後の目に眩し

日面の地蔵のつむり落椿

林泉の人のにぎはひ雪柳

横浜 秋山 文子